

シリーズ・戦争の証言 4

開疎集団児童学

著 雄 館 浜

著者紹介

浜館 菊雄 はきぐみ きくお 1902（明治35）年，青森県に生まれる。
青森県立師範を卒業後，青森県の小学校の教員に奉職。
1934（昭和9）年から東京に転じて，1936（昭和11）年
から1965（昭和40）年停年退職まで世田谷区立代沢小学
校に奉職，おもに音楽専科教師をつとめる。

学童集団疎開

シリーズ・戦争の証言 4

1971年11月25日 第1刷発行

¥ 750

著 者	浜 館 菊 雄
発行者	東京都千代田区西神田 1-2-15 石合ビル 崔 容 徳
印刷者	東京都新宿区東五軒町 50 信毎書籍印刷
発行所	東京都千代田区西神田 1-2-15 石合ビル 株式会社 太平出版社◎

振替東京99563 電話東京291-9744・9752, 294-7083

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

シリーズ・戦争の証言 4

開疎集団児童学

著 雄 館 浜

I313. 55
J422

4



188227



日文 701647316

太平出版社

—ズ・戦争の証言 4

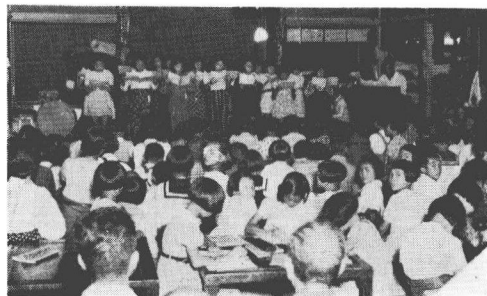
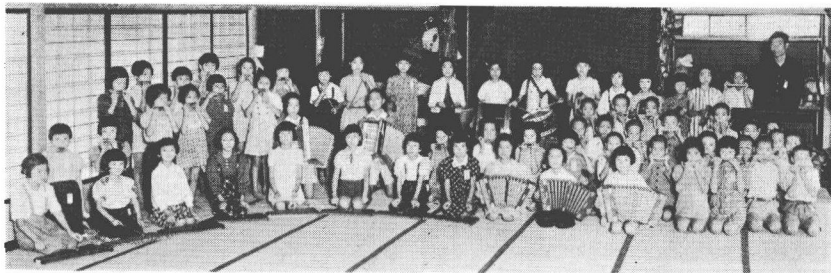
開疎集団児童学

著 雄 館 浜





疎開直後、つたの湯前で(1944年8月、中央は著者、その左はつたの湯主人二木さん)



↑ 器楽合奏(疎開後間もなくのころ、疎開先の旅館の大広間で)

← 合唱風景(上の写真よりすこし後、夜)

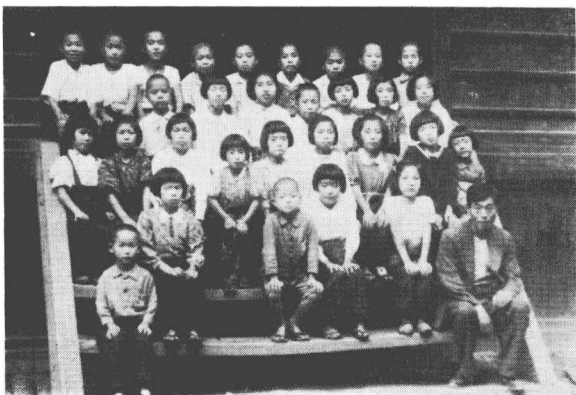


女鳥羽川畔の休息(1944年夏の終わりがごろ)

つたの湯の裏山で(19
44年初秋、うしろは松
本平)



真正寺玄関前で(1945
年夏)



真正寺境内で(1945年
秋、写真下の句は著者
の作)



春めくや 地蔵の温くみに ふれて見し(一 草)

シリーズ・戦争の証言 4

学童集団疎開

浜館 菊雄 著

シリーズ・戦争の証言 をおくるにあたって

Ⅰ 一五年戦争の結末として敗戦という悲痛な民族的体験を経て四半世紀がすぎた。しかしこの体験から非武装・不戦の思想をみちびきだして現代史に生かすことがついにできないまま、時のながれはかけがえのない民族的体験を蝕みつくし空洞化しさろうとしている。

Ⅱ 一五年戦争によってむなしく失われていったおびただしい生命と肉体がいまだに真に弔われぬまま怨念の魂となってアジアの地を匍い空に満ちているなかで、日本軍国主義は巨大な復活をとげている。多くの意味でその復活がほかならぬわれわれ自身によって支えられている再生日本軍国主義は、アジア諸民族に新たな脅威をつきつけながら、民族の悲劇をふたたびわれわれに強制しようとしている。

Ⅲ 戦争が過去のものとしてでなくわれわれの前に現実のものとして避け難く立ちはだかっているいま、戦争に全生活と思考を埋没させていた世代と戦争をまったく知らない世代とをつらぬく共通の目標をさがし、戦争体験と非武装・不戦の思想を検証しなおすことは、さしせまって重要である。

われわれは、戦火に焼かれていった兄弟たちの残した色あせた紙の上の

かすかな筆跡からも、はるかな歳月を超えて迫るなまなましい痛恨の念を読みとらなければならない。また、生き残った者ひとりひとりの悲惨な体験についても、怨念の魂となって斃れていった同胞にたいする悲痛なおもはゆさを超えて、あえて重い口をひらかなければならない。

Ⅳ かならずしも一様ではないさまざまな語り口をもつてなされる平和と戦争への証言をつづるこのシリーズが、非武装・不戦の思想を民族全体のものとして打ち固める作業に、ささやかにせよ、ひとつの契機として役だつことを念じてやまない。

一九七一年六月 太平出版社

読者の皆さんへ 戦争中またはその前後に書かれた記録や資料（日記・メモ・手紙、その他）をできるだけ多く本シリーズに加えたいと思います。このような記録をお持ちか、その所在についてお心当りがありましたら、どのようなものでも結構ですから、小社までご一報下さいますようお願いいたします。これらの資料は、小社で責任をもって保管し、

久野収・五味川純平・鶴見俊輔・橋川文三・安田武

の諸先生と一しよに拝見させていただき、すぐれた記録については関係者のご承諾を得て刊行したいとおもいます。

宛先 東京都千代田区西神田一―二―一五 石合ビル

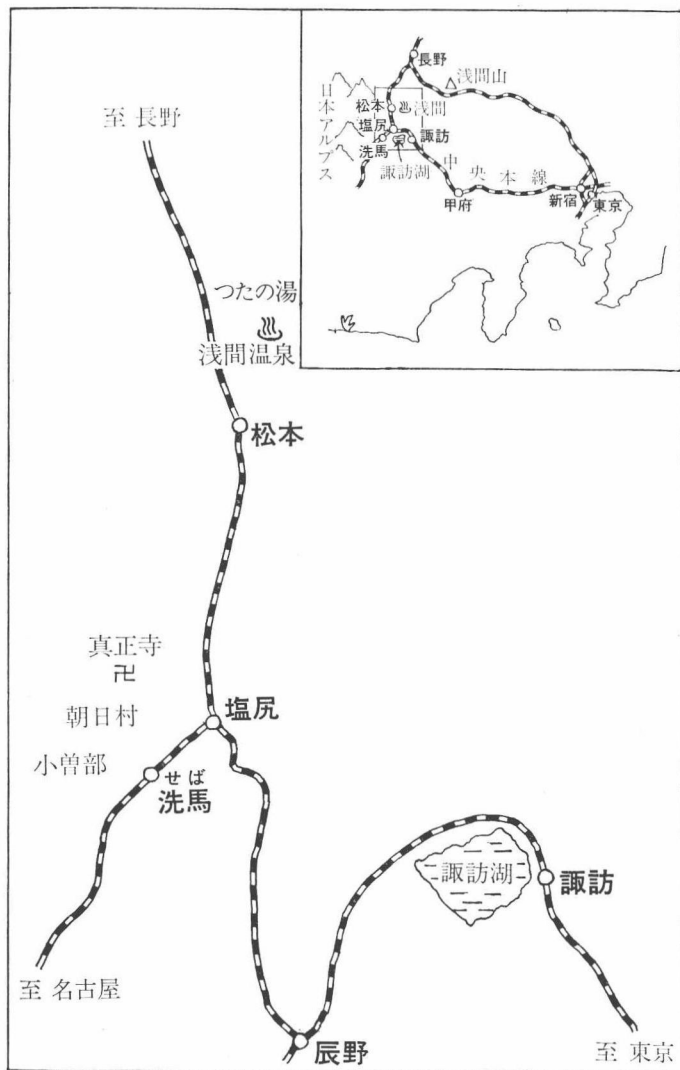
太平出版社 シリーズ・戦争の証言係 宛

シリーズ・戦争の証言⁴
 学童集団疎開
 目次

シリーズ・戦争の証言をおくるにあたって

1	学童集団疎開始まる	15
2	出 発	27
3	集団生活第一歩	34
4	郷 愁	41
5	食 生 活	49
6	親心種種相	53
7	秋草の丘	69
8	損われゆく子ら	75
9	秋から冬へ	83
10	教育の盲点	97
11	厳冬と児童の死	125

12	駅頭の別れ	133
13	再疎開	142
14	特攻隊員と子どもたち	154
15	落人	161
16	新しい生活	172
17	端境期	206
18	農繁期	219
19	夏の生活	229
20	薪運び	233
21	秋風譜	241
22	集団生活終わる	248
	あとがき	257



1 学童集団疎開始まる

一九四四（昭和一九）年七月一七日、突然、学童集団疎開実施の通達がもたらされ、われわれ学校職員や、父兄たちをろうばいさせたのであった。

もっともこのことは、まったく予知できなかった寝耳に水のぬきうち的な話ではなく、すでに六月初めごろから、マリアナ諸島の危機が伝えられ、戦局の急速な転換が生んだ話題であったのである。しかし、わたくしたちはいままで、この噂を極力否定し、一笑に付してきたのであった。

「先生、ほんとでしようか」。

と、早気回しで、とりこし苦勞の父兄に質問されても、

「いや、デマですよ。そんなことは、絶対できることじゃないですよ」。

と、一蹴していたのであった。

それはまったく知らぬが仏で、これほどの大事業が一朝一夕に計画されるはずはないのだから、わ